

# ハバナの十六世紀

## —— キューバ植民地時代建築史断章 ——

加藤 薫

はじめに

ラテンアメリカ・カリブ文化圏に残存する植民地時代建築のなかで、キューバ植民地時代建造物の辿った歴史は他のカリブ海諸国のものとも、大陸内部諸国のそれらともかなり異っている。西欧による、いわゆる文献に記された「発見」の歴史は他のラテンアメリカ諸国に比べて大きく先行していた。(注1)にもかかわらず、このキューバ島で展開された建築活動とそこで採り入れられた様式モデルが、唯一の例外を除いては、広く他のカリブ海諸島やアメリカ大陸部の植民地建築の規範となったと一般化して言うことは出来ない。(注2)

その理由を要約すれば(一)もともと絶対数の少なかった先住民人口が急減し、彼らの文化伝統も早期に消滅したこと、(二)植民者人口の急激な増減により継続的かつ計画的な都市空間の創出に失敗したこと、(三)前記二点に関連して、他のラテンアメリカ諸地域では決定的

な都市空間の構成要素を産んだ修道会組織による宗教建造物への重点的投資がおこなわれなかったこと、(四)他の西欧諸国、即ち新大陸・カリブ圏におけるスペインの独占的利権を脅かすオランダ、イギリス、フランスといった後発国家からの侵略に備えることが最重要課題となったこと、(五)前記(三)、(四)の帰結としてキューバの植民地建築は世俗的な要請、即ち貿易や政治、それに物理的防衛機能といった安全保障面に集中しがちであったこと、が挙げられる。

結果として、その「発見」が早かったにもかかわらず、キューバの都市空間を決定づけた建造物の建設活動の興隆は十七世紀に入ってからであり、その中心となった城塞建築は規模の大きさと完成度という点では比類ないものが登場した。ただしこの評価が直ちに、北のフロリダ半島から南のパタゴニアまでを結ぶ大西洋沿岸諸港湾都市に置かれた城塞建築意匠デザイン開発に決定的な役割を果たしたということとは結びつかない。(注3)

城塞建築の他に現存するキューバの植民地時代建築の主なものは市民邸宅と世俗教会組織に属するパロッキア（教区教会堂）建築である。しかしキューバの歴史的事情からこれら建造物の残存数は少なく、またそれら貴重な歴史遺産の保存状態も決してよいとはいえない。歴史的事情とは、ほぼ植民地時代を通じて台風なみに定期的にキューバの港湾都市を襲ってきた西欧の海賊や正規軍による破壊行為、一八六八年に始まる独立戦争から一八九八年に勃発する米西戦争、そしてその後のアメリカ合衆国支配下でありながらも一九〇二年に独立を果たすまでの約三十四年間に及ぶ戦闘での破壊、そして一九五九年のキューバ革命達成以来社会主義政策の一環として貫かれた一九九〇年代初期まで続くカトリックの宗教的権威の抑圧、それに自然災害を加えた諸点に集約できる。（注4）

しかし一方ではキューバの首都ハバナ市のビエハ地区やサンクティ・スピリトゥス州トリニダー市がユネスコの世界遺産に指定され、植民地時代の建築遺産の保存修復の機運が高まってきている。この流れは慢性的危機に陥っているキューバ経済の外貨獲得資源として観光産業に力を入れ始めた現政府の政策も追い風となっている。もち論このことがキューバ植民地時代建築の再評価に繋がるものであっても、政府の観光政策に迎合する形で過大な評価を与えることは長い目で見て正しいことではな

い。しかし一方、キューバ革命以来、主としてアメリカ合衆国の経済封鎖政策を迫認する形でキューバ固有の文化伝統に関する研究調査を中断してきた西欧先進諸国の学者、またキューバ人による研究調査の成果発表の機会を積極的に与えてこなかった学会やジャーナリズムといったものの態度を無批判に受容してよいものでもないだろう。

キューバ革命以来、同じ第三世界という宿命を負っているにもかかわらず、他のラテンアメリカ諸国の美術研究に比べ、キューバ美術に関しての成果発表は政治的に見られる、あるいは政治的に利用される度合いが強かったように思われる。それゆえに調査対象としては敬遠されることも多かったことだろう。しかし時代の推移や国際的社会情勢の変化と共に、少なくとも植民地時代美術研究においては今や他のイスパノアメリカ諸国と同様に論ずることにほとんど障害はない。しかしいざ何か新しく資料調査しようとしてみると、一九三〇年代から六〇年代までの三〇年間のキューバ植民地時代美術に関する蓄積に比べ、六〇年代から九〇年代までの三〇年間の成果は出版物点数や国際レベルでの発表件数を見る限りほとんど無いことに愕然とするのだ。

こういつた背景の元に、一九九八年八月より九月にかけて筆者は二十三年ぶりにキューバを訪れる機会に恵ま

れた。ハバナ市とトリニダー市を中心に行動したが、大学院生時代には全く見えなかったラテンアメリカ植民地時代建築の全体の流れの中に占めるキューバ植民地時代建築の位置が、歳月を経て今は少しよく見えるようになった。これは単に二十三年前と比べて都市環境も整備され、個々の植民地時代建造物も観光資源として活用すべく見栄えよく修復されていたということだけではないだろう。本稿は長らく放置したまま知識の空白部分となっていたキューバ植民地時代美術の特性について試論としてまとめてみたものである。

#### キューバの先住民文化

キューバ島は、アメリカ合州国フロリダ半島の南約百八十キロメートルの位置にあり、約八十キロメートル離れた東側にはハイチとドミニカ共和国に分割されたイスパニョーラ島、約百四十キロメートル離れた南にはジャマイカ島やケイマン諸島、そして北はバハマ諸島と周囲を島に囲まれている。東西方向に約千三百キロメートル、南北幅が最大で約二百キロメートルと東西に細長く延びる本島の他に千六百以上の小島や岩礁がキューバ共和国に属する。面積は約十一万平方キロメートルと大アンティール諸島の中でもちろんのこと、カリブ海の中でも最大の島国である。(図1参照)

フロリダ半島沖からベネズエラ沖まで弧状に点在する大・小アンティール諸島、およびカリブ海側に面したアメリカ大陸沿岸部の間をカノア(カヌー)程度の小船で往来することはそれ程難しいことではなく、かなりの頻度でこういった海上交通手段による不断の交流があったことは確実である。(注5)

現在の知識情報で確認できるキューバ島最古の先住民文化は、シボネイ(シボネオ)と呼ばれる大体紀元年前後に別の島から到着した集団によるもので、キューバ島西端に位置する現在のピナル・デル・リオ州地域にグアナハタバイ文化圏を築いた。シボネイの歴史は紀元前五千年前までに遡ることが出来、その起源はミシシッピ川流域説や、南米説などあるが未だ特定出来ていない。(注6)

キューバ島でシボネイの最も初期の遺物とされるのはグアナハカビベス半島の最西端にあるサン・アントニオ岬一帯から出土しているが、沿岸漁労と採集生活に基盤を置く非定住集団で、天然の洞窟などを住居とし、土器の制作や農業の痕跡はない。またサン・アントニオ岬からメキシコのユカタン半島先端までは約二百キロメートルの距離しかないが、マヤあるいはそれに先行するメキシコ先住民文化と接触・交流した痕跡は今の所確認されていない。(注7)

シボネイ集団は紀元三世紀頃に西のカリブ諸島から到

来してきたアラワク集団に属するタイノ人移住の波を受け、その文化を吸収しながら紀元十二世紀頃までかけて少しづつ島を東進し、十三世紀初頭には現在のシエンフエゴス州の南端の港町シエンフエゴス市（旧名ハグア）あたりまで進出したようだ。しかもここに到達するまでの過程で断続的に隣りのエスパニョーラ島のタイノ人の影響を受け、十三世紀頃までには他のアンティール諸島と共通の文化特性、すなわち木材や石、貝などを使って定住生活に必要な日用品の制作能力、を持ち、母系制に基づく階級社会を形成したことが明らかに becoming している。（注<sup>8</sup>）

各集団の規模は小さく、大体百戸前後、人口約三百から五百人程度を限度としていた。集落は円形に構成され、椰子の葉で葺いた屋根を持つ掘建形式の柱で確保された各家屋の出入り口は円の中心方向に開けられ、広場が日常生活の場となっていた。この広場に面して祝祭や集会、共同作業などに使われる規模の大きな建造物が建てられるのが一般的だった。また河口部や湖沼地帯では水上に家屋を建てる形式も存在したようだ。（注<sup>9</sup>）

十五世紀中葉になってキューバ島の先住民社会は大きく変わった。複数の集団が別個に、しかもさして時間差をおかないでキューバ島の東、及び北東部から海上を渡って侵入し、またたくまにキューバ島を支配してしまった。

この外来の先住民集団はやはりタイノ人であった。このタイノ人のキューバ島侵入の第二の大波は、南の小アンティール諸島がカリベ人に侵略されてゆく過程で玉突き現象的に北西方向の移住を余儀なくされた結果である。新タイノ人達は球技儀式などメソアメリカ文化の要素や、父系社会制度、セミ神信仰をキューバ島に持ち込み、シポネイ<sup>11</sup>旧タイノ人共同体に比べればより効率的な定住農耕の方法や高度に専門化した技術を持つ職能集団で構成された社会分業システム、利害の調整能力と宗教的權威を持ち合わせた首長（カシーケ）を政治的指導者とする職能分担と階級に基づく社会を組織した。そしてコロンプスが到着するほんの五十年前までにはタイノ人たちは先行するシポネイ共同体や旧タイノ人の文化を吸収、あるいは消滅させる形で次々に新たな共同体を建設していたのだった。（注<sup>10</sup>）

バラコア、バヤモ、カマグエイ、クバナカン、ハグア（現シエンフエゴス）、ハバナ、マリエン、グニグアニカ等の都市名や州名は、著名な首長名や共同体名称を記録したスペイン人達によって地名として残されたものである。新タイノ人は食料として伝統の豆やユッカの他にトウモロコシを食べ、木綿の衣服を着用し、儀式や紛争処理に球技を行うなど、大陸部の先住民のものと共通する文化を持っていた。しかしその伝播の経路や歴史につ

いては不明である。一般に新タノイ人の家屋構造は大家族主義を反映してか一軒の規模が大きく、千人規模の共同体だと大体五十前後の居住用家屋と他に五、六軒の公共建造物があったとされる。(注11)

さてスペイン人達の到来した時期の推定人口だが、キューバ島全体で六万人程度とする説から約百万人はいたとする説まであり、その差は大きい。(注12) しかしその人口がどの位あったにしても、スペイン人達の到来後約二十年の間にこういった先住民達は消滅し、その文化も残らなかつたことの方が重要なのである。(写真1)

#### 植民地化のプロセス

イタリアのジェノバ生まれのコロンブス(クリストバル・コロン)総司令官に率いられた三隻の船隊がカナリア諸島の寄港地ゴメラ島から、西に横たわる未知の海域めざして出発したのは一四九二年九月六日のことだった。そして西航三十七日目にして現在のワトリング諸島の一つであるグアナハニ島に到達する。そしてその二週間後の十月二八日に現在のキューバ島に遭遇し、上陸する。コロンブスは最初この島が黄金の国ジパング(日本)だと思ひ込み、ここから金を始めとするアジアの特産品の商業貿易への新たなルートが開設されると想像した。しかし続く約二週間の内陸調査でこの地がジパングでもカ

タイ(中国)でもないことがほぼ確認されたが、まだ島か大陸の一部なのか依然不明であり、コロンブスは混乱する頭をかかえたまま次の航海に出発した。そして十二月六日にはエスパニョーラ島に到達する。(注13)

コロンブスは一四九三年九月二十五日にスペインのカディス港から第二回目の航海に出発し、九十四年四月末にキューバ島南岸を航行し、ジャマイカ島まで到達するが、この時もまだキューバが大陸の一部だという考えはすてていなかった。キューバが島であると推定したのはフアン・デ・コサで一五〇〇年の地図から島としての記載が登場する。(注14) この年はちょうどコロンブスの第四回目の航海の二年前にあたる。その後かなり詳細な海岸線の探險を実施したのがセバステイアン・オカンプで一五〇八年のことだった。しかしキューバ島の存在は他のカリブ諸島の状況に比べコロンブスの最初の遭遇以来二十年間は比較的忘れられたような存在だった。

キューバの先住民の運命は隣りのエスパニョーラ島の植民地化プロセスに大きく影響を受けた。コロンブスは第二回目の航海で新領土インディアスの総督として千五百人の兵士を引き連れ、スペイン国王との共同出資による合弁事業を軌道にのせる経営者としての使命を持っていた。この事業とは、エスパニョーラ島の先住民タイノ人との交易や金鉱開発のことである。しかし生産性の低

い農業しかやってこなかったタイノ人社会は突然に到来した千五百人もの人員に食料を十分供給することは不可能だった。またカリブ海諸島の中で唯一金鉱のあったのはエスパニョーラ島だが、やはり金の採掘に専従する労働者を養う農業生産力がなかった。タイノ人との対等な商取引の魅力は無くなり、一転してスペイン人達はタイノ人を労働力として利用することとなり、村落の分配と人員の困い込みを始めた。結果はタイノ人社会の崩壊と大量死であった。一五〇二年にエスパニョーラ島新総督として赴任してきたニコラス・デ・オバンドは三十一隻の船に二千五百人のスペイン人を連れてきた。それまでにタイノ人社会の困い込みはエンコミエンダ制の名のもとに合法化されていた。このオバンドと大量の新規到来者によってタイノ人人口減少は加速化された。エスパニョーラ島の重要産業となった金鉱採掘に必要な先住民労働力の不足は決定的になり、ここで他の島々から先住民を強制移住させる案が浮上し、実行に移された。そして一五一年に始まるキューバ島の本格的な征服事業の一環として、この島で捕獲したタイノ人をエスパニョーラ島へ送るプログラムが実行された。キューバにおけるタイノ社会の消滅はキューバ内部におけるスペイン人の植民地化による要因の他にこの強制移住があったことも見逃せない要素である。(注15) いずれにせよ十六世紀中期の先

住民総人口は三千人を大きく割り、さらに減少傾向にあった。結局はその血統も旧大陸から持ち込まれる病気や過大な労働、食料不足、心理的絶望感による集団自殺が原因での死滅や、新たに強制移住させられてきたアフリカ黒人奴隷との混血により早い時期に途絶えることとなった(注16)。

#### 十六世紀のキューバ

ニコラス・デ・オバンドの後を継いでインディアスのアルミランテ及びゴベルナドールの職に任命されたのはデイエゴ・コロソ(クリストバル・コロソの息子)だった。デイエゴ・コロソは、セゴビア出身でコロソバスの第二回航海に参加したデイエゴ・ベラスケスをキューバ島の植民地化事業推進のために派遣する。一五一年にベラスケスは三百人の兵士と共にキューバ島東端のマインに到着するがそこで先住民の激しい抵抗に会う。この時までキューバは他の島からの逃亡先住民の避難先になつていたのである。中でもアトウエイを指導者とする先住民との戦いは激しかった。(注17) ちなみにキューバ史の中でアトウエイは「最初の革命家」とも呼ばれ、現在でもビールのブランド名として使われている。

ベラスケスは先住民の抵抗にあいながらも、一五二二年に現在のパラコア近くにヌエストラ・セニョーラ・デ

ラ・アスンシオンという最初の植民地の建設に成功し、暫定的にキューバの首府とした。記録では公共建造物としてカビルドの会議施設、城塞、それにパロッキア教会堂（一五一八年にはローマ法王レオ十世の認可でカテドラルに昇格）がこの年に完成し、合わせてベラスケスの個人邸宅も建てられたというが、どれも現存していればキューバ最古の植民地時代建築という事になる。<sup>(注18)</sup>

その後、現在のバヤモ市近くにサン・サルバドル（一五一三年）、一五一四年には中部南海岸にサンティシマ・トリニダー、サンクティ・スピリトゥス、シウダー・デ・カマグエイ、そしてサンチャゴ・デ・クーバ各植民都市を建設した。そして一五一五年には天然の良港に面したサンチャゴ・デ・クーバに首都機能を移す。現在の首都の前身であるサン・クリストバル・デ・ラ・ハバナ市の建設が始まったのは一五一六年で、五十人の男性兵士がサンチャゴ・デ・クーバから派遣された。<sup>(注19)</sup>

周辺のカリブ海諸島の状況を見てみると、ファン・デ・ボンセ・デ・レオンがプエルト・リコのポリンハエンを占領し（一五〇八年）、一五〇九年にはファン・デ・エスリエルがジャマイカ征服事業に着手する。この年にはまたバルボアがパナマ地峡を徒歩で横断し、太平洋を確認した。大きく捉えれば、十六世紀初頭の十年間までにカリブ圏のスペインの覇権がほぼ確定したということに

なる。そして次の二十年間はこういったカリブ諸島での征服・探検事業から植民活動に転換してゆく時期ということになる。しかし別な言い方をすれば、征服者たちが求めた黄金は思ったほどなく、労働力となるはずだった先住民人口は激減し、一獲千金のドラマはもはや期待できないことが明らかになったということである。征服者たちの関心は、それまでにもはやアジアの一部ではない未知の大陸というイメージの固まってきた大陸内部に向いてきた。カリブ海諸島はそこが目的地ではなく、真のエル・ドラードを目指す中継点でしかなかった。

一五一九年、キューバ島からエルナン・コルテスがマヤ人の住むユカタン半島の彼方にあるというアステカ帝国目指し、五百人近くの兵士と共に西進する。そして一五二一年に首都テノチティトラン（現メキシコ市）を陥落させる。一五一九年にペドロ・アリアス・デ・アビラによってポルト・ベロ港が建設され、ここが中米から南米への征服拠点となった。一五三三年にはフランシスコ・ピサロによるインカ帝国征服、一五三八年にはコロンビアにおいてヒメネス・デ・ケサダによるチブチャ王国の征服とボゴタ市建設がはじまる。事例はまだまだ尽きないが、要するに、一五一〇年代から四〇年代までスペイン人たちの関心はもっぱら新大陸内部の征服事業にあり、野心と能力に溢れた人ほどカリブ海諸島の植民事業には

見向きもしなくなり、スペイン人人口も急減していったということだ。

焦点を再びキューバに戻すと、植民活動が下火になった一五二〇年代から四〇年代にキューバ社会の性格を特徴づけることとなる現象が発生する。まずはサトウキビ栽培の定着である。サトウキビは稲科の植物でコロンブスの第二回航海（一四九三年）の際に苗がイスパニョーラ島に持ち込まれ、栽培にも成功した。その後キューバに移植されたわけだが、これがキューバに生気をもたらした。少なくともブラジルが砂糖市場を支配するようになる十六世紀後半になるまでの期間、西欧のキューバ産の砂糖への需要は右肩上りで増え、それに比例して地元消費分以上の生産力を上げていったのだ。

こういった砂糖産業には膨大な労働力が必要であった。しかし先住民人口は「一五四〇年までに、事実上絶滅させられていた」（注20）という記述があるように、もはや利用できる存在ではなくなっていた。そこで代替労働力としてアフロ・アフリカン奴隷の輸入が本格的に実施されるようになった、アフロ・アフリカン奴隷禁止に関する法令がインディアスで公布されたのは一五〇一年とコロンブスの第一回航海からわずか九年後のことであった。しかし人々の関心は生産性向上と労働力確保の問題に集中し、結果としてカリブ海諸島はイスパノアメリカ各地

にアフロ・アフリカン奴隷制導入へと導き、しかも自らがほぼ完全な形で確立させた経験を持つ地域となったのであった。（注21）

キューバもその例外ではなかったが、文化面での興味深い事実として、奴隷船の往来が活発化する一五二〇年以前に先住民とアフロ・アフリカンの混血化は始まっており、アフリカのギネア地方特産の植物栽培、例えばヤマモを先住民たちが食べるようになった一方、アフロ・アフリカ人たちはキャッサバから精製したタピオカ粉やトウモロコシ粉を使った料理を食べるようになっていた。おそらく植民地化初期に発生したシマローンと呼ばれた逃亡奴隷たちが異文化接触や混血化に一定の役割を果たしたものと見られる。（注22）

しかし大筋で見る限り、かつてベラスケス総督が一五二三年に死ぬまで熱望したようにキューバ島は経済力においてスペイン人植民地の拠点とはついにならなかった。（注23）一五五〇年までにキューバ全島に居住するスペイン人人口は五百人を割るまでに減っていったのだ。（注24）

#### 十六世紀のハバナ

十六世紀中頃になると、キューバ島は生産力を誇る一植民地というよりも、スペイン本国とアメリカ大陸・カリブ圏に広がる全スペイン植民地を結ぶ交易ルートの中



繼拠点という役割の方が重要となった。大陸内部から産出される金銀はもとより、皮革、絹、綿花などの一次産品の生産量は上り、またタバコや砂糖といった熱帯商品に対する西欧内での需要は増大した。スペインは五分の一税の確保と共に、スペイン産の加工製品を売る商品市場としてのラテンアメリカに物資を供給するためにも輸送船団を組織する必要があった。こういった船団はスペインに敵対する西欧列強の主たる略奪目標となった。十六世紀前半はスペインの国力も武力も圧倒的に強く、個別の戦闘レベルでも、国際政治レベルでも他国の侵略行為を阻止する力量を持っていた。年二回の定期輸送船団はスペインからカリブ域までは集団で航行し、ここからメキシコのベラクルス港、コロンビアのカルタヘナ港、パナマのポルト・ベロ港方面に分かれ、さらにベネズエラやホンデラス方面に航行する船があった。どの方向に向かったにせよ、帰路をとるにあたっては、必ずキューバ島のハバナにまず集結し、最低六週間は滞在し、準備を整えてからまた護衛船付きの船団を組んでスペインに向かった。植民者が増えるにつれ、これら船団とは別に手紙類や緊急必需品を運ぶ六〇から百トンのクラスの軽く、速度の速いカラベラ船がハバナとスペインの間を三か月毎に往復するようになった。こうしてハバナは新大陸最大の造船所、修理施設を備えたさまざまな航海用品の一

大供給地となっていた。(図2参照)

他の西欧諸国にとってわかっていたことは、スペイン船への海賊行為の方が通常の貿易や植民地経営よりも利潤が高いことだった。スペイン船攻撃や植民地攻撃を始めたのはまずフランスであった。少なくとも一五六〇年まではスペインの海軍力は圧倒的で、このフランスの海賊行為も、被害の規模もスペイン本国がフランスとの西欧内での政治交渉で優位に立つためのカードのひとつとして許容範囲内と考えていた節がある。(注<sup>25</sup>) それでも被害を最小に食い止めるための対抗策として一五六一年からは輸送船団にガリエオン戦艦の護衛をつけるようになり、港湾都市の補強戦略が考えられるようになった。フランスの海賊・侵略行為は一五七〇年代を境に下火になるが、代わってイギリスとオランダの略奪行為がより広範囲により激しくおこなわれるようになる。ここに至って植民地人はスペインの外交政策や交渉能力だけに頼るのは不毛な選択だと感じ、自力防衛の道を選ぶ。とりあえず大西洋をはさんで西欧に対峙する、北はフロリダ半島から南はカラカスまでのスペイン植民地港湾都市防衛線を築く構想が生まれた。メキシコのベラクルス、カンペチェ、プエルト・リコのサン・ファン、コロンビアのカルタヘナなどが石造の強固な城塞で囲まれた都市に生まれ変わっていったが、その中でもハバナの防衛力強化

が最重点課題となった。キューバの首都は島の南側でカリブ海に面したサンチャゴ・デ・クルバだったが、対西欧列強への防衛線強化という意味では大西洋に面し、スペインへ送る植民地物資の集結地となっていたハバナの方が重要だと認識されるに至った。

ハバナ最古の城塞は木造で一五四〇年に建設されたが、これは白兵戦での銃からの攻撃に耐える程度のものであったようだ。背景にはイサベラ女王から一五三八年に当時のキューバ総督エルナンド・デ・ソトにハバナを城塞化するようにという勅令が送られたが、予算は付けられなかったため、暫定的な対処をしたということだろう。その後補強はされたにせよ、この城塞は一五五五年のフランス人海賊の放った火のために消滅した。この事件はある意味でその後のハバナ、のみならず他のカリブ諸島やカリブ海、大西洋に面したラテンアメリカ港湾都市の設計面で決定的な意味を持つ。要約すれば「海賊と建築家の戦い」ということになるが、港湾都市の建設にあたってはまず住民のサバイバルの必須条件である城塞プランが最優先され、教会堂を含め他の建造物は全てマイナーな扱いになった。住民の個人住宅は都市計画の中ではほとんど無視された。現在のように拡大化したハバナ市の片隅に城塞があるという地勢から十六世紀の状態をイメージするのはかなり難しいことだが、極端な言い方をすれば

石造りの厚い壁が市民のバラック住宅を守るという形になったということである。(注26)

これが第一の特色とすれば、二番目の特色としては、こういった城塞といった軍事施設の建設は、建築家でも西欧で特殊な教育を受けたスペシャリストが担当したということだろう。西欧内で開発された火器や軍事作戦に對抗する機能重視の建築の中には、土着的な建築要素が借用されたり、西洋建築の中に融合されたりする余地はなかったことだ。最もキューバでは先住民文化は早々と消滅し、アフロ・アフリカンの文化がそれに代わるというものでもなかったから、いずれにしても建材が現地調達ということ以外、西欧軍事建築の意匠とアイデアが全開となったことは必然であった。ではハバナで西欧直伝の城塞であれその建築活動が順調に進行したかということ決してそういうわけでもなかった。やや時代は後のこととなるが一五八二年十二月のデータでは、ハバナに住むスペイン人戸主(男性)の数は五十五人で、これに女性と子供の数を加えても総勢二百七十七人であり、これに先住民(混血後)として区別される戸主が五〇人(家族総数は不明)程加わるが、これがハバナの全人口であった。(注27) 五〇年代からの人口データは今の所不明だが、八〇年代の環境に比べてそれ以前ほど定住の魅力があったとは思えず、従って五十五人より少なかったことはほ

ほ確実である。そしてこのように人口が少ない上にまたその全ての住民が建設事業要員であったわけではないのでいきおい労働力からしてどこか外部から導入するしかなかった。ということは建設活動が着々と進展したとは言えないということだ。事実、ハバナの城塞化計画は途中で何度も計画を変更しながら十八世紀後半まで続けられ、完成時にはキューバもラテンアメリカのスペイン植民地をも取り囲む政治、社会的環境は、もはや城塞を必要としない程に大きく変わっていた。

#### 十六世紀後半のハバナ建築

##### 八一V 都市計画と城塞化

ハバナが強固な大西洋防衛線の最重要拠点として城塞都市化する計画は一五五〇年代には既定の路線となつたが、同時期にハバナのスペイン人住民や現場に派遣された建築技師がその戦略的な意義を十分理解していたかといふとそうでもなかったようだ。ゴンサレス・ペレス・デ・アングロ総督（在位：一五五〇～五十六年）が一五五〇年ファン・デ・アビラやアントニオ・チャベスといったハバナ在住のスペイン人と共に提案した都市建設計画では教会堂、病院、監獄、肉屋、といったかなり生活に密着した建造物がリストの最初にあり、これにファン・デ・レハス及びファン・デ・レベラという二人の建築技師の

構想するサンハ・レアル（ハバナの上水道システム）と城塞化プラン（フォルタレサ・ビエハ）がつけ加えられている。（注28）

最も石造の城塞だけの構想ならばすでに一五四〇年にマテオ・アセイツモという経歴は不明だがサンチャゴ・デ・クーバの古くからの住民だった技師がハバナに七か月滞在した際にスペイン国王宛てに図面を描き上げていたという。ウエイスの記述によれば、全体は正四角形で一辺が四十八メートルあり、四隅に高さ十メートルの小さな塔を設けていたようだ。（注29）これは現在ではラ・フェルサ・ビエハと呼ばれているが構想だけの幻の建造物である。おそらく前述のファン・デ・レベラはこの設計プランの存在を知っており、それをアングロ総督の都市構想に活かしたものと思われる。レベラは一五五三年八月に単独でスペイン国王に城塞の必要性を訴える書状を送っている。（注30）

アングロ総督の後にキューバ総督として着任したのは軍人デイエゴ・デ・マサリエゴス（在位：一五五六～六年）で、彼は自らの使命がハバナに城塞をつくることにあると自覚していた。マサリエゴスは五六年二月にスペイン国王フェリペ二世に書状を送り、軍事建築の専門家の派遣を要請している。これを受けてフェリペ二世はセビリヤで活躍していたヘロニモ・デ・ブスタマンテ・

デ・エレラを派遣しようとしたが急病のため、バルトロメ・サンチェスは代役として赴任させる決定を行った。サンチェスはキューバで建築設計を行うと同時に予算管理、それに設計から施工に必要な人員の採用まで責任を持つキューバ初の建築のプロということになった。ハバナに赴任したのは一五五八年一月二十一日のことで、職種別に採用した親方クラスの職人と石工職人を十四人ほど連れてきていた。(注31)

ハバナに到着後、サンチェスがまず着手したのは全体的な都市計画の策定だった。新大陸における都市プランには規範があり、まず四角い開放型の中央広場(プラサ・デ・アルマス、メキシコではソカロと呼ばれる)の位置とサイズを地形や社会環境条件を考慮して決定する。大陸内部の都市計画ではこの中央広場のデザインが決まったあと、その各辺を基準に格子状に街路を設け、その街路で区分された各ブロック毎に施設や想定される居住者、工定期限に合わせた建造物の設計を行う。街路幅は、軍事行動の利便さやその都市が担う戦略的な要請、それに街路に沿って敷設される上下水道の規模、雨の多少など気候条件も考慮して決定される。街路に沿った各ブロックの壁の高さや厚さ、窓の位置や大きさ、その数なども視覚的な要請や生活上の快適さと共に防衛機能が重視された。中央広場に面した隣接ブロックには都市の中枢機

能を担う建造物を配置する。一般に中央広場東側に教会組織のために割り当てられ、北側に行政事務のための庁舎を置く。西側には行政者や政府高官の公邸や警護にあたる軍隊施設、そして南側には市民生活に必要な店舗や、階級の高い市民、軍人のための住居を配置する。中央広場から離れた周辺部にゆくに従って身分の低い階級、人種的には純粋なスペイン人から遠い混血や先住民、より知性や技術を必要としない肉体労働者、それに新規植民者のための居住区となってゆく。理論的に土地が有る限り外延部は無限に増殖する開放型都市プランということになる。具体的な設計レベルでは各都市の地理的、社会的、歴史的條件によって様々なバリエーションがあるが、例えば山中の僻地であろうともラテンアメリカの植民地時代に建設された全ての大陸内部都市村落においてこの基本プランは採用された。

しかしながらハバナのような港湾都市にはこの格子状街路を持つ開放型都市プランは基本条件の違い、即ちまず城塞で囲まれた閉鎖型であること、そして住民の数も無限に受け入れられるものではないこと、防衛軍事機能が全ての市民活動に優先すること、などから適用されなかった。しかし中央広場は城塞の外ほとんど唯一の公共空間であり、日常生活では食料から衣料に至る物資の定期市を開催したり祝祭に利用し、また兵隊の訓練を行

うなど不可欠なものであったためその規模の大小や形態の違いはあれど必ず確保された。サンチェスもまず居住区の位置決めなどの前にプラサ・デ・アルマスの位置を決定する。中央広場は一五五九年か遅くとも六〇年には完成し機能していたと思われるが、現在同名で呼ばれているプラサ・デ・アルマスはサンチェス没後の一五七七年以後に完成したものであり、サンチェス設計のプラサ・デ・アルマスがどこにあり、規模や形状はどんなものであったかはもはやわからない。<sup>注32</sup> ちなみに記録だけに残るハバナ最初の公共広場(プラサ・プブリカ)は一五四〇年の最初の木造城塞(第一世代のカステイリョ・デラ・レアル・フェルサ)建設以前に設定されており、その空間に面してやはりハバナ最初の木造教会堂(ラ・パロッキア・デ・マヨール)が建てられた。しかし一五三八年に火災で消滅している。<sup>注33</sup> なおこのプラサ・プブリカは現在のプラサ・デ・アルマス(一五七七年以後のもの)の位置にはほぼ対応している。

サンチェスは当然ながら最重要課題であるラ・レアル・フェルサの建設にとりかかるが病気のため、一五六〇年四月にオチョア・デ・ルヤンドを後任としてスペインに帰国する。しかしルヤンドは本来ハバナに大聖堂を建設するために赴任してきた人物で、サンチェスのプロジェクトを兼担する余裕はなかった。そこで既にルヤンドと

共に大聖堂建設のマエストロ・デ・カンテリア(石工監督)としてハバナに赴任していたフランシスコ・デ・カロナをサンチェスの正式の後任者として指名する。カロナは、ウエイスも指摘しているようにスペインではセビリヤの大聖堂建設においてはマエストロ・マヨール(総監督)の地位まで得た人物であり、もしこのルヤンドの元で働いていたカロナと同一人物と考えるなら、ハバナではかなり低い地位に甘んじていたということになる。何らかの特別の事情があったと推測すべきか、あるいは同姓同名だがセビリヤ大聖堂建設を指揮したカロナとは全くの別人物(親子の可能性もある)と考えるべきか、今の所は結論がでない。<sup>注34</sup>

いずれにせよ、カロナの指揮によってラ・レアル・フェルサは一五七七年にはほぼ完成に近付くが、一五七九年からファン・バウティスタ・デ・ロハスが建築総監督となり、そして一五八〇年八月二十六日、サンチェスが取り組んでから二十年以上も経って完成した。(写真2)

一辺が三十メートルの正四角形で壁の厚さは六メートル、高さは十メートルある。最上階には完成の前年まで総督だったフランシスコ・カリエーノ(在位：一五七七〜一五七九年△死亡▽)の要請で軍の将校達の出入りするサロン、将軍クラス以上の訪問者のための宿泊施設が最後に追加された。ラ・フェルサ城壁内には総督の公邸も建

造されたが、ここは一五九〇年からファン・デ・テハダ（在位：一五八九～一五九四年）総督が初めて使用するようになる。（図3参照）ちなみにハバナが正式に「市」に昇格したのが一五九〇年であり、さらに首都に昇格したのは一六〇七年のことであった。

テハダはスペイン船の航海の安全と植民地保護を考え、大西洋防衛線の策定とこの防衛線の中で最も重要な地位を占めるハバナの城塞化に熱心だった。テハダの要請により、すでに一五八六年にイタリア出身だがカルロスV世時代からフェリペII世の代に渡ってスペインの軍事顧問で城塞建築の専門家であったパウティスタ・アントネリ（一五六六～一六一六年）が現地調査を実施し、九つの港湾都市を結ぶ防衛線構想の具体策と、この九つの各都市の城塞化プランをスペインでのアントネリの上司にあたるティブルシオ・スバノッチに提出していた。そして一五八九年にテハダと共に再度ハバナを訪れ、工事進行中のエル・モロとラ・プンタをより堅固にする修正案を作成し、現場指導にあたった。一五九四年にキューバを離れるまでにはこのうちカステイリョ・デ・モロ、及びカロナが一五六六年に工事に着手して以来の懸案だったサンハ・レアル（上水道システム）を完成させる。なおアントネリはパナマとカルタヘナ（コロンビア）の城塞化を現地で手がけた後、一五九九年スペインに帰り、

一六一六年二月一日マドリッドで死亡しているが、同姓同名の息子がおり、やはり父親の職業や地位を継いだのと同時に西欧だけでなくラテンアメリカでも活動したため、混同しやすい。（注35）

エル・モロは内部に奥深いハバナ港入口東側の小高い丘の上に建てられたイレギュラーなポリゴン形（五角形）の城塞で、数十キロメートル先の沖合いを通る船が見える場所にある。歴史的には一五三八年にエルナンド・デ・ソトが高さ約十メートルの石造見張り台を建設した場所がこの塔の機能を補強する形で、一五五一年から城塞化が進められた。現在でも近代的設備を持った灯台と海上保安施設が設けられており、航海の安全と船舶管理のために機能している。（写真3）アントネリの設計によるエル・モロが完成したのは一五九四年八月十九日で、ラ・プンタの完成については正確な期日は不明だが一五九八年の最初の数か月の間だったろうと推測される。（注36）

サンハ・レアルはハバナの市民生活を機能させるために最も重要だった上水道システムの名称である。チヨレラ川から三本の上水道をハバナに繋げるもので総延長は十一キロメートルあり総石造であった。一五九二年にパウティスタ・アントネリが完成させた幹線水道は、現在では地名を迎るだけでも容易ではないが、プエンテス・グランデス（水の引込口）からドラゴネス通り（現在は

無い)を抜けて現在も存在するカテドラル(大聖堂)前の広場からムエリエ・デ・ルス通り(これも現在は無い)から最後は海に注ぐというものだったが、アントネルリの帰国前から次の支線水道作りが引き続き行われた。一日に最大七万立方メートルの水を供給する能力を持っていたが、これは市民一人一日平均百リットルの水を使用するとしても人口七万人規模まで支えられるものだった。サンハ・レアルは結局人口が二十万人を越えた一八三五年までハバナ唯一の上水道として機能し続けた。(注37)

この他十六世紀中に完成していた公共建造物としては、オスピシオ・デ・サン・フェリペ・イ・サンチャゴという現代でいう病院と救護施設と孤児院機能を合わせ持ち、建物の中に教会堂まで備える福祉施設があった。これも最も早い記録としては一五四五年にすでに機能していたという記述もあるが、クリストバル・デ・ロダの設計で一五七〇年に完成し、オピスピ通り面に面していたと言われる、通称オスピタル・ピエホの名で呼ばれてきた建物と同一のもの、あるいはその前身であるかはまだ確定できない。(注38)

## 八二V 宗教建築

布教上のキューバの特殊事情とは、既に述べたように(本論13頁)、大陸部では先住民の改宗と布教の実権を

一手に握っていた修道会組織が十六世紀もかなり後になるまではキューバで積極的な活動を展開しなかったことだ。これはもち論、改宗すべき先住民の絶対数が少なくなっていたこと、大陸部への通過拠点としてしか考えていなかったこと、都市建設において城塞化プログラムが常に最優先し、修道会組織の活動に始めから制約が大きかったことなどによる。アフリカから連れてこられた黒人奴隷も急激に増加したとは言え、建前としてはキューバに到着する以前から既にキリスト教徒になっていた。

つまりキューバにおけるキリスト教組織の活動はかなり早い時期からスペイン人も含めたカトリック教徒への日常的宗教サービスの充実に特化できたということである。従ってハバナにおける最初の宗教建造物も世俗教会組織で使用するパロッキアであった。記録上最初にレアル・フェルサ内敷地に建造された木造のパロッキアは一五三八年に火災で消滅しているが、その後一五五〇年に、同じ場所に今度は石造のパロッキアを建造する計画がスタートし、予算もついた。これが十八世紀に大聖堂(カテドラル)に昇格する以前のラ・パロッキア・マヨールである。一五七五年には身廊部まで完成し、ミサなどの用に供されたという記録はあるが、当時の容姿を現存するイエズス会の改修再設計後の大聖堂の姿から類推するのは全く不可能である。

ハバナにおける聖フランシスコ修道会最初の修道院建設構想は一五七五年に始まった。しかし実際の建設は一五八八年になってからであり、完成はそれから百年以上経った十七世紀末であった。しかもさらに十八世紀に二回の大改修があり、全体は十八世紀の建造物として現存している。聖ドミニコ修道会はこの聖フランシスコ修道会修道院近くに用地を確保し、一五八七年には最低限の活動が出来る拠点を築いたが、サン・ファン・デ・レトラン修道院として正式に認可されたのは一六六九年のことであり、おそらく完成はこの頃のことと思われる。いずれにしても一九二〇年に廃棄された。(注39)

この他には規模の小さい修道士専用の礼拝堂、あるいは修業のために隠遁生活を送る宗教施設が幾つか建てられた。ラ・エルミタ・デ・ヌエストラ・セニョーラ・デル・ブエン・ピアへは十六世紀中頃に完成したが、これが現在あるイグレスシア・デル・クリストの前身である。(注40)一五五九年にはラ・エルミタ・デル・ウミリヤデロが一旦完成しているが、後に大改修されイグレスシア・イ・エル・オスピタル・デ・パウラとして存続した。また一五七四年にはエルミタ・デ・サンタ・アナの献堂式が行われたようだがこれは現在のサンタ・アナ教会堂の改修前のものだろう。(注41)

### ハ三V市民建築

ラテンアメリカのスペイン人植民都市の自治運営母体として最初に組織されるのがカビルドで、日本語では参事会とか評議会、あるいは市議会などと訳される。しかし制度としては今日私たちが考えるような民主的プロセスを経てカビルドの構成メンバーが選ばれるというものではなかった。十五、六世紀という時代性と、ゼロから植民都市を築いていった、という条件から、大体が聖職者代表、征服者(植民者)代表、スペイン国王の立場を代弁する行政者代表、といった人たちが組織された。メンバーは利益や身分を同一とする各々の集団の中から推薦され、最終的にはスペイン国王によって承認される。従って建設初期の都市におけるカビルドの構成員数はせいぜい四、五名程度のもので、これに書記のような記録係がいればカビルドは成立した。各植民都市におけるカビルドの成立と、カビルドの活動のための専用建造物が建てられた、ということの間に相関関係はない。何故なら少人数のため、メンバーの個人邸宅を使って持ち回りで会議は開催出来たためである。ハバナの場合、一五八八年末になってようやくカビルド専用の施設として、石造の個人邸宅を買い取るプランが具体化し、一五九〇年に予算がついたとの記録があるが現在ではどの家のことか不明である。(注42)



ウエイスはキューバの植民地建築史の流れを大きく、十六世紀の初期、十六世紀末から十七世紀の形成期、そして十八世紀のバロック黄金期と区分しており、そのうち、十六世紀の初期建築の特徴を表象しているのが城塞と個人邸宅だと指摘している。<sup>(注43)</sup>

個人邸宅の平面プランはいわゆる「スペイン風」である。すなわち四角形を基本に、街路に面した壁はフラットで高く、玄関部のサイズも窓の数も最小限に押さえられている。内部にはパティオがあり、そのパティオを囲むように部屋がある。一階部は使用人たちも出入りする個人ビジネス関連設備や台所、倉庫、家畜小屋のある空間で、二階部分が家族のプライベート空間であり、食堂や応接間、居間、風呂、洗面所などがある。十六世紀前半のハバナの歴史に登場し、当然かなりの規模の個人邸宅を持っていたと推察される個人名としてはファン・パウティスタ・デ・レイェス、ファン・デ・ロボラ、バルトロメ・サンチェス、アロンソ・カスターニョなどが挙げられ、ブラサ・デ・ラス・アルマスに隣接する現在のオビスポ通り周辺にあったが、現在ではどの建物が誰のものでオリジナルの形はどうだったかを確認するのはもはやほとんど不可能である。その中でオビスポ通り一七番地と一一九番地の間を占めるカーサ・デ・オビスポ(司教の館)は十六世紀末建設当時のオリジナルの姿

を残している稀な例である。但し平面プランは間口約五メートルしかないのに、奥行きが約二十二メートルもあるというイレギュラーな形をしている。また他のラテンアメリカ植民地との比較で考えた時、キューバの個人邸宅を特徴づけているのはムデハル様式天井装飾への好みが強くて出ている事で、これはとりわけ十七世紀の個人邸宅について言えることだが、この傾向が十六世紀から見られるものなのかどうかまだ判断出来ない。<sup>(注44)</sup>

ハバナが正式に「市」に昇格した十六世紀末から人口は急増加し、十七世紀初頭には約二万人を越えたといわれるが、そのほとんどはアフロ・アフリカンであり、産業面ではともかくも植民地建築文化に大きく貢献することはなく、大枠としてハバナの汎イスパノアメリカの性格に大きな変更が加えられることはなかった。とは言え、ハバナの政治、社会、経済的、歴史的環境はまた他のイスパノアメリカ植民地とは違う特性があり、それらの違いを反映して十七世紀のハバナ建築は発展した。紙幅の都合でハバナの十七世紀建築の特色にまで言及できなかったが次回に回すことにする。

- (注1) 一四九二年十月二十七あるいは二十八日のこと。コロンブスの第一回目の航海記録に記されている。コロンブスはフェルナンド王とイサベラ女王の間に生まれた娘ファナにちなんでファナ島と命名。第一回目の航海では北東部沿岸に立ち寄っただけだが、一九九四年の第二回目の航海では南部海岸部を探検し、タイノ人と交易している。ちなみにコロンブスが最初に「発見」したのはグアナハニ島で一四九二年十月十二日のこと。
- (注2) ここで言う唯一の例外とは城塞建築のこと。
- (注3) 完成年を比較するとポルト・ベロヤカルタヘナの方が早いとも言える。ハバナの場合、最大のカバーニャス城塞が完成したのは十八世紀のこと。
- (注4) ハバナ市旧市街、サンクティ・スピリトゥス州トリニダー市とその近郊にあるサン・ルイ盆地がユネスコ世界文化遺産に登録されたのは一九八二年のこと。
- (注5) カリブ海諸島の先住民文化についての記述はそのほとんどが海上交通による交流を当然視している。逆に言えば各島の土着的発展の相についての個別研究は先住民の絶滅ということもあり、あまり進んでいないということにもなる。
- (注6) シボネイとグアナハタベイを別の文化とする説もある (Julio Le Riverend, Cuba, Land and People, Ediciones Caribbean's Color S.A., 1996, P.8)。より詳細な記述には José Cantón Navarro, History of Cuba, Biography of a People, Editorial SI-MAR, S.A., La Habana, 1998, pp.15-18。  
ミシシッピー川流域説などは Andrew Coe, Cuba, Passport Books, 1997, P.11。
- (注7) Joaquín E. Weiss, La Arquitectura Colonial Cubana, Editorial Letras Cubanas, 1979, p.5。
- (注8) Juan Antonio Cosculluela, Historia de la nación cubana, libro primero, 第一章、第二章に解説。Le Riverend はタイノ人の最初の移民は8世紀からとしている。Julio Le Riverend, Cuba, op.cit., 1996, p.8。
- (注9) Weiss, op. cit., P.6。
- (注10) Coe, op. cit., p.11。
- (注11) この計算の根拠は Weiss, op. cit., P.6 の記述より。
- (注12) 例えばコーは11万2千人でその90%がタイノ人 (Coe, op. cit., p.11) ウェイスは20万人説 (Weiss, Op. cit., P.7) コスクリュエラは6万

- 人説 (Coscolluela, op.cit., 第一章)。ウェイスはマテイサンの百万人説も紹介しているが出典不明。
- (注13) こういった混乱については青木康征, コロンブス 大航海時代の起業家, 中公新書, 1989, 第二章, 第三章に詳しい。
- (注14) Weiss, op. cit., p.8の記述及び付録図1掲載のmapamundi del cartógrafo y navegante español Juan de la Cosa correspondiente a las indias occidentales, 1500, 参照。カンティエーノの世界図 (1502年) でもキューバは独立した島として描かれている。(Peter Whitfield, Image of the World, The British Library, London, 1994, 樺山紘一監修, 世界図の歴史, ミュージアム図書, 東京, 1997, p.p.44-45.)
- (注15) Donald E. Worcester & Wendell G. Schaeffer, The Growth & Culture of Latin America, Oxford University Press, 1970, vol.1, p.24.
- (注16) R. メジャフェ著/清水透訳, ラテンアメリカと奴隷制, 岩波現代選書, 1991, p.45.
- (注17) Le Riverend, op.cit., p.8.
- (注18) Weiss, op. cit., p.p.9-10.
- (注19) Weiss, ibid., p.10.
- (注20) トーマス・R・Bアーチャー著/藤永茂訳, コロンブスが来てから, 朝日新聞社, 1992, p.22.
- (注21) メジャフェ, op.cit., p.19.
- (注22) メジャフェ, ibid., p.45.
- (注23) これは筆者の見解。ベラスケス総督の積極的な活動については, Weiss, op. cit., p.p.9-10. 及びp.15を参照。
- (注24) Worcester & Schaeffer, op. cit., p. 38.
- (注25) 高橋均/網野徹哉著, ラテンアメリカ文明の興亡, 世界の歴史, 第18巻, 中央公論社, p.p.252-255.
- (注26) George Kubler, and Martin Soria, Art and Architecture in Spain and Portugal and their American Dominions 1500-1800, Penguin Books, London, 1969, p.65.
- (注27) Weiss, op. cit., p.25. 出典はIrene Wright, Historia documentada de San Cristobal de la Havana durante el siglo XVI, p.49.
- (注28) Weiss, op. cit., p. 16.

- (注29) Weiss, op. cit., P.30.
- (注30) Weiss, op. cit., P.31.
- (注31) Weiss, op. cit., P.19.
- (注32) Wrightの出版物<注27>で複製された地図は一五七五年頃のもの。  
出典はFrancisco Calvillo作地図、Archievo de indias, Sevilla,  
この見解は筆者のもの。Weissもこの点に言及しているがこれほど強い  
言い方はしていない。(op.cit.,p.26)
- (注33) Weiss, op. cit., p.p.43-44.
- (注34) Weiss, op. cit., p.20.
- (注35) Pál kelemen, Baroque and Rococo in Latin America, Dover  
Publications, New York, 1967, p. 124.
- (注36) Weissの記述では一五九五年九月二日から完成は二十九カ月以上経っ  
たいつかで一六〇一年以前としている。op.cit., p.37.
- (注37) この施設についての記述があるのはWeissの著作のみ。(op. cit.,p.p.  
57-58.)
- (注38) Weiss, op. cit., p.56.
- (注39) Weiss, op. cit., p.p.47-48.
- (注40) 「ラ・エルミタ」という名称で建築物のある特定の用途、タイプをあら  
わしている事例はラテンアメリカにおいてはキューバ以外に知らない。
- (注41) Weiss, op.cit.,p.49.
- (注42) Weiss, op. cit., p.50.
- (注43) このまとめ方はLe Riverend,op.cit,p.43 に準拠している。
- (注44) トゥーサンの著作でもキューバにおけるムデハルの事例は全て十七世紀  
以降のもの。Manuel Toussaint, Arte Mudejar en America,  
Editorial Porrúa, Mexico, 1946.

## 参考文献

- 青木康征、コロンブス大航海時代の起業家、中央公論社、1989
- Alfonso Hernández, 100 Preguntas y Respuestas sobre Cuba, Editorial  
Pablo de la Torriente, 1996. 神代修訳、キューバガイド、  
海風書房、東京、1997.
- Bedini, Silvio A., ed., The Christopher Columbus Encyclopedia, Simon  
& Schuster New York, 1992.
- Berger, Thomas, A Long and Terrible Shadow, Douglas & McIntyre,

- Canada, 1991. 藤永茂訳、コロンブスが来てから 先住民の歴史と未来、朝日新聞社、1992.
- Coe, Andrew, Cuba, Passport Books, Illinois, 1997.
- Cosciuella, Juan Antonio, Historia de la nación cubana, vol.1~7, libro primero, La Habana, 1952.
- Kelemen, Pál, Baroque and Rococo in Latin America, Dover Publications, New York, 1967.
- Kubler, George, and Martin Soria, Art and Architecture in Spain and Portugal and their American Dominions 1500-1800, Penguin Books, 1969.
- Le Riverend, Julio, Cuba, Land and People, Ediciones Caribbean's Color, S.A. Cuba, 1996.
- Mellafe, Rolando, Breve Historia de la Esclavitud Negra en America Latina, Secretaria de Educación Pública, Mexico, 1973.  
清水透訳、ラテンアメリカと奴隷制、岩波書店、東京、1991.
- Núñez Jiménez, Antonio, San Cristobal de la Habana, Ediciones Caribbean's Color, S.A., 1995.
- Toussaint, Manuel, Arte Mudejar en America, Editorial Porrúa, S.A., Mexico, 1946.
- Weiss, Joaquin E., La Arquitectura Colonial Cubana, Editorial Letras Cubanas, Cuba, 1979.
- Whitfield, Peter, Image of the World, The British Library, London, 1994.  
樺山紘一監修、世界図の歴史、ミュージアム図書、東京、1997.
- Worcester, Donald E. & Wendell G. Schaeffer, The Growth & Culture of Latin America, 2 vols, Oxford University Press, New York, 2nd ed., 1970.
- Wright, Irene, Historia documentada de San Cristobal de la Habana durante el siglo XVI, "El Siglo XX" Print Shop, Havana, 1927.

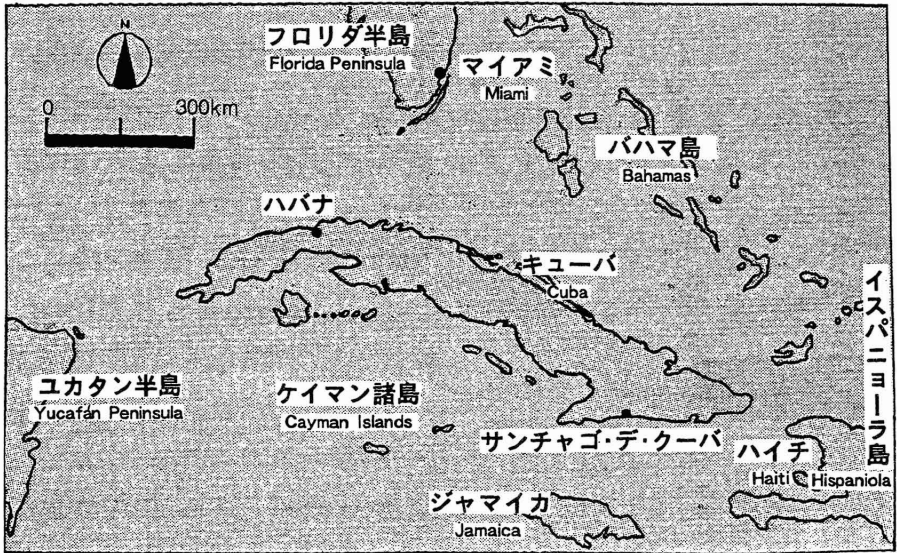


図1 キューバ島の位置，在日キューバ大使館提供資料より。

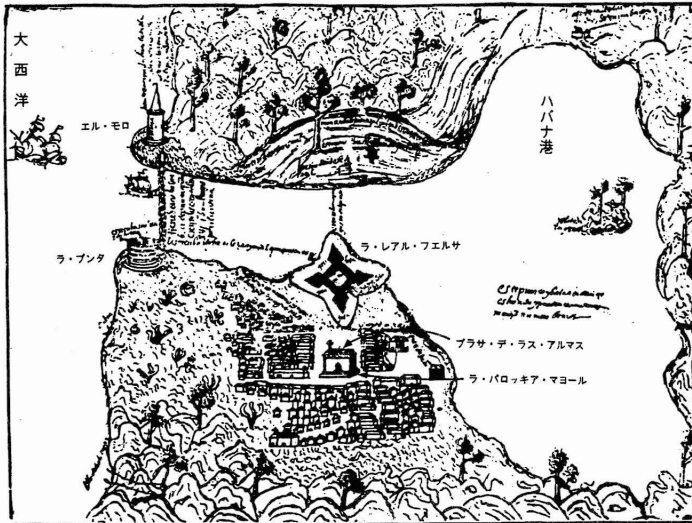


図2 ハバナ港の概観 (1575頃)  
 フランシスコ・カルピリョ図、セビリヤ、アルチボ・デ・インディアス蔵  
 Irene Wright 出版物より転載。

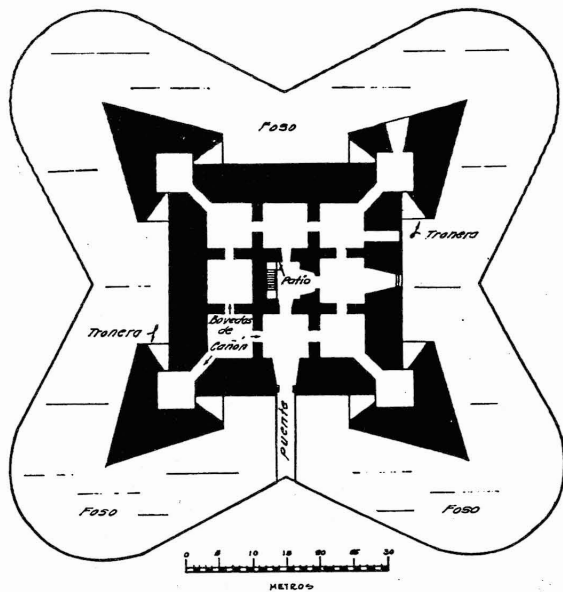


図3 ラ・レアル・フェルサ平面図（1558-1577建設当時），  
ウェイス出版物より転載。



写真1：タイノ人の住居(復原)グアマ国立公園，筆者撮影。

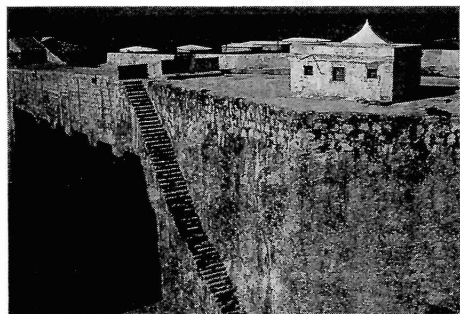


写真3：エル・モロ，ハバナ市，筆者撮影。

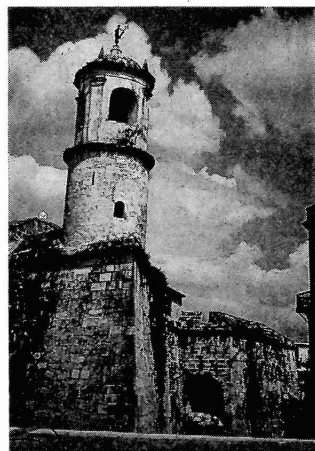


写真2：ラ・レアル・フェルサ，  
ハバナ市，筆者撮影。